

微かな吸引音が静かな部屋に響き、伊吹は嫌でも自分の耳がその音を追っているのを感じ微かな羞恥心を自覚。

その微かな羞恥心を感じた裏側にはゆったりとした快感を喜んで受け取る自分の姿もあり、伊吹の頭の中は軽く戸惑いと混乱が生じている。

「・・・はあん・・・」

思わずこぼれるあえぎ声はひらひらと花びらのように宙を舞い、床に落ちて弾けるとまるで媚薬のように二人の間の時間を色濃いものにしていく。

ここはメゾン煉獄の中にあるシメオンの部屋。

伊吹は愛撫を受けながら自分はシメオンに天界の様子を聞くためにここに来たのを思い出すとなぜこんな風に愛撫を受けることになったのか？ということを出していった。

（ああ、そういえば・・・）

ある程度シメオンが天界での話を終わらせた後、自分に好意があることをそれとなく伝えて来たの伊吹は思い出した。

伊吹もその好意にそれとなく応じ、お互いにもう心は知っている間柄なせいか突然シメオンが伊吹にキスをして来たのだ。

軽いキスはいつしか深い口づけへと変化し、シメオンの手が自分の衣服のボタンを外し始め、気が付けばお決まりの愛撫を経て今にいたるのだった。

シメオンの愛撫のやり方は、いいね、だがとても慣れなくて、「天使は清く高貴な存在である」という伊吹が人間界で聞いて来た話は人間の作り話かファンタジーであつたことをまざまざと伊吹の前に見せつけてくる。

チュ、チュ